

## たじみん昼話 147

### 数学は文系・理系を救う

学校外の会合や会議に参加すると、少数の不可思議な行動をとる人に出会うことがある。話題が理科や数学になると、会話姿勢が消極的になり、その場から離れる人だ。理由の大半は、「文系だから」だ。特に専門が文学・外国語系出身の方に多い。専門が理系の人も、専門外に対して同様のことがいえる。

理由を深掘りすると、「数学が苦手な文系に進んだので、その話題には……」との回答が冒頭にくる。時には、「経営の数学と学校の数学は違いますから」と断言することもある。桔梗は理系だが、詳しくない(文系と分類される)歴史や文学の話にも積極的に参加する。知らない事を知り知の創造を図ることを目的に参加しているからだ。

知を文系・理系(特に高校から)に分類するのは日本ぐらいではないだろうか。この分類は、明治維新以降の近代化を進めるために、「国力を手っ取り早く上昇させる」ことを目的に構築した、明治式人材教育の名残だ。つまり先の回答は、その意識を令和の社会人になっても、まだ引きずっていることの表れだろう。

先の回答は、知的好奇心や向上心を持たなくてよいという言い訳に過ぎず、数学の好き嫌いの問題であると桔梗は考える。そしてこの嫌悪感の原因は、数学が、「クリエイティブで楽しく人の役に立つもの」という物語を語りきれなかった学校教育にあると考える。特に高校数学の内容は、一部のマニアが好む抽象的思考に特化しすぎる嫌いがある。この内容では、マニアになりきれない人にとっては、とても好きになれる代物ではないからだ。

これを解決するためには、数学の問題解法を通して憧れを持てる数学を提供することだ。社会で活躍するお洒落でキラキラした数学のイメージを持てるように、授業で表現することだと桔梗は考える。

数学は、見えない補助線の引き方を学ぶ教科だ。生徒が人生の課題に対峙したときに、それを解決する補助線だ。だから、数学は単なる計算力を習得するものではなく、状況判断力と修正力を修得する教科だと認識を改めるべきなのだ。

教科横断型の教育を多治見高校が推進する理由は、理系・文系という枠組みの根底にある学問的教科面より、社会事象と結合した実務的教科面の学習を重視するからだ。この教育は、文系・理系の双方の生徒に、「なぜ他の種類の科目を学ぶのか」を理解させ、専門外教科の苦手意識を低減することができるからだ。

多治高生の諸君、全部の教科を好きになる必要はないが、苦手意識のある教科の考え方は理解しよう。恐らく苦手意識を払拭する近道はそこにあるから。